スティーヴン・キング

セル 上

STEPHEN KING
CELL

新潮文庫

白石朗訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮文庫

セル

上巻

スティーヴン・キング

白石　朗訳

新潮社版

8342

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

リチャード・マシスンとジョージ・ロメロに

原我（イド）が、欲求充足の遅れを甘受することはない。原我はつねに、いまだ満たされないままの欲望という緊張を感じている。　――ジグムント・フロイト

人間の攻撃衝動は本能的なものである。これまで人間が、種としての生存を確実なものとすることを目的として、攻撃衝動を抑制するための儀式をつくりだしてきた例はない。この観点から、人間はきわめて危険な動物だといえよう。

――コンラート・ローレンツ

これできこえますか？

――ベライゾン・コミュニケーションズ社の携帯電話のＣＭ

上巻◆目次

〈パルス〉 11
モールデン 145
ガイテン・アカデミー 289

下巻◆目次

ガイテン・アカデミー（承前）
薔薇が萎れて、この庭はもうだめ
ケントポンド
電話ビンゴ
ワーム
カシュワク
システムに保存
謝辞
訳者あとがき

セル

上巻

主要登場人物

クレイ・リデル……グラフィック・ノヴェル作家
シャロン……その妻
ジョニー……〃息子
トム・マッコート……口ひげの小男
ウルリッチ・アッシュランド…ボストン市警巡査
リカーディ……ホテルのフロント係
アリス・マックスウェル……15歳の少女
チャールズ・アーダイ……ガイテン・アカデミー校長
ジョーダン……〃生徒

文明世界が二度めの暗黒時代にむけて滑り落ちていくにあたって、血にまみれた道をたどったこと自体は驚くにあたらないが、そのスピードはというなら、どれほど悲観的な未来学者でさえ予想もできなかったほどだった。その瞬間が来るのを、いまかいまかと待ちかまえていた観さえあった。十月一日、神は天にしろしめし、ダウ平均株価は一万百四十ドル、航空機のほとんどは定刻どおり運行していた（シカゴの空港を離着陸しているフライトだけは例外だったが、これは想定の範囲内だ）。二週間後、地球の空はふたたび鳥の縄ばりになって、株式市場は過去の記憶になっていた。ハロウィンを迎えるころになると、ニューヨークからモスクワまでのあらゆる大都市は芬々（ふんぷん）たる悪臭を天にむけて立ち昇らせており、以前の世界はすべて過去の記憶になりはててい た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

1

のちに〈パルス〉の名前で知られることになった現象がはじまったのは、十月一日の午後、東部標準時で三時三分だった。もちろん〈パルス〉という用語は不適切だが、発生から十時間もすると、この事実を指摘できるだけの知識のある科学者はあらかた死亡したか、正気をうしなったかしていた。どのみち、名称にはとりたてて意味はない。意味があるのは、この現象がおよぼした影響のほうだ。

問題の日の午後三時、歴史にはほとんど名前を残さないひとりの若い男が、ボストンのボイルストン・ストリートを――弾むようなとさえ形容できそうな――足どりで歩いていた。男の名前はクレイトン・リデル。顔には、軽やかな足さばきに見あう混じり気のない満足の表情がのぞいていた。男の左手にはポートフォリオバッグの把手が揺れていた――ファスナーを閉めて留め金をかければ、作品の持ち運びにもつかえ

るたぐいのバッグだ。右手の指にからめてあったのは茶色いビニール製のショッピングバッグで、たまさか目をむけた人のため、袋には《スモール・トレジャーズ》と店名が刷りこまれていた。

ショッピングバッグのなかで前後に揺れていたのは、小さな丸い形の品だった。見る者がいればプレゼントだろうと思うだろうし、その見立ては正しかった。さらに見た人は、このクレイトン・リデルという若い男が、なにかささやかな（いや、ひょっとしたら〝ささやか〟どころではないかもしれない）成功の記念品を《スモール・トレジャーズ》で見つくろってきたのだろうと思うかもしれず、その見立ても正しかった。バッグにはいっていたのは、かなり高価なガラスのペーパーウェイト。内側にたんぽぽの綿毛の形をした灰色の靄のような飾りがある品。クレイトン・リデルはこの品をコプリースクエア・ホテルから、自分が泊まっているもっと質素なホテル、アトランティック・アヴェニュー・インに帰る途中で買い求めてきたのである。ペーパーウェイトの基部についていた九十ドルの値札には恐れをなしたが、それよりもずっと奇妙なことがあった。自分がこれだけ高価な品を買える身分になったとわかると、その事実によほど恐れを感じたのである。

店員にクレジットカードをわたすときには、肉体的ともいえる勇気さえふりしぼら

なくてはならないほどだった。いや、自分のためにペーパーウェイトを買うのなら、結局カードをわたせなかったかもしれない。きっと、気が変わったとかなんとか、適当な口実をもごもごつぶやいて、そそくさと店をあとにしたことだろう。しかし、これはシャロンへの贈り物だった。シャロンはこの手の品が好きだし、いまでも自分を好いてくれている――その証拠にボストンにむけて出発する前日、《応援してるわ、あなた》といってくれたではないか。この一年のあいだ、ふたりがかわした口汚い言葉の数々を思うにつけ、妻のひとことには胸が熱くなったし、いまは――まだ手おくれでないのなら――妻の胸を熱くさせたかった。ペーパーウェイトは小さな品物だが（なにせ店名からして《小さな宝物（スモール・トレジャーズ）》だ）、シャロンなら、ガラス玉の中心深くにある、局所的な霧のような灰色の精妙な靄を気にいってくれるはずだった。

2

クレイは、アイスクリームの移動販売車が鳴らしているオルゴールの音に注意を引かれた。移動販売車は、（コプリースクエアよりもさらに豪華な）フォーシーズン

ズ・ホテルと道路をへだてて反対側、ボストン・コモン公園の前にとまっていた。ボイルストン・ストリートのこちら側に、二、三ブロックの長さにわたって広がっている公園だ。車体にはアイスクリーム・コーンがペアになって踊っている絵が描きこまれ、その上に虹の七色で〈ミスター・ソフティ〉とメーカーの名が書き添えてあった。車のまわりに三人の若者があつまっていた。みなトートバッグを足もとにおいて、注文の品を待っている。そのうしろには、パンツスーツ姿でプードルを繋いだリードを手に握っている女。さらにうしろには、十代の少女のふたりづれ。どちらもローライズ・ジーンズ姿だった。ふたりともいまはiPodのイヤフォンを耳からはずして首にかけていたが、それはおしゃべりをするためだ――ふたりはくすくす笑ったりせず、なにやら真剣に話しこんでいた。

クレイがこの一行のうしろにならぶと、それまでの小人数のあつまりが短い順番待ちの列に変わった。関係が冷えこんでいる妻にプレゼントを買った。家に帰る途中で〈コミックス・シュープリーム〉に立ち寄って、息子への土産に《スパイダーマン》の最新号を買う心づもりもある。だからここで、自分にちょっとしたご褒美をおごってもかまうまい。いまクレイは、すばらしいニュースをシャロンに伝えたい気持ちでいっぱいだった。しかし妻の帰宅は三時四十五分ごろで、それまでは連絡をつけられ

ない。このあと、せめてそのくらいの時間まではアトランティック・アヴェニュー・インにとどまっているつもりだった。といっても狭苦しい客室を落ち着きなく歩きまわり、いまは留め金で閉めているポートフォリオバッグの中身を漫然と見ているだけになるだろう。それを思えば、ここで〈ミスター・ソフティ〉のアイスクリームを食べるのもいい時間つぶしになる。

販売車に乗っている男は、三人の若者に注文の品をわたしていた。ディリーバーが二本。チョコレートとバニラの二色ソフトクリームの特大サイズは、三人のうち中央に立っている金満家の注文で、どうやらこの若者がふたりにおごっているらしい。若者が最新流行のバギージーンズのポケットに手を突っこみ、ドル紙幣がつくる鼠の巣をかきまわしているあいだ、プードルを連れたパワースーツ女はショルダーバッグに手を突っこんで携帯電話をとりだし――この手のキャリアウーマン御用達の服をまとうような女性なら、出かけるときにアメックスを忘れても携帯電話を忘れることはない――フリップをひらいた。背後の公園で犬が吠え、だれかが叫び声をあげた。クレイの耳には喜びの叫び声にはきこえなかったが、頭をうしろにめぐらせても目にはいってきたのは数人の歩行者とフリスビーをくわえて小走りする犬が一匹（それを見て、公園内では犬はリードにつないでおく決まりではなかったか、という疑問が頭をかす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton